

# 洛陽伽藍記の諸版本とその系統

畑 中 淨 園

## 一 序

洛陽伽藍記は、既に知られてゐる如く、北魏の末葉から東魏にかけて使事してゐた楊衒之が、武定五年（五四七）即ち、北魏が滅亡して都が洛陽から鄴に遷つてより十四年目に舊都洛陽に来て、その荒廢せるを見て感慨おく能はず、このまゝに放置せんか、恐らく後世傳へるものがないでなくなるであらうと思ひ、本書を選したのであることは楊衒之自らその序に於て述べてゐるところである。

而して、その内容は、寺院を主としたものであることは勿論であるが、その他、それら寺院に關係した當時の政治情勢、社會狀態、王公貴族武將等の動靜をつたへてゐることは、本書が單なる伽藍記ではなく、一つの政治社會史とも言ふべく、更にその寺中に存する所の碑志約

二十條を擧げてゐることゝ相俟つて、正史の足らない所を補ふ幾多のものを持つてゐる。然も北魏の人の著述で世に傳へられてゐるものは極めて希で、その流轉して今に至るものは、本書の外に、酈道元の水經注、賈思勰の齊民要術の二書があるばかりであることは、本書が資料的價值に於て特に重要な地位を占めてゐるものと言はねばならない。

所が本書の版本は單行本の外に、數種の叢書の中に收められ、その各々が文字の異同極めて多く、従つてそれらを校訂し、又は編次を新にしたものに集證・鈎沈・合校・注・校勘記等があつて、その他景印本を合せるならば實に二十數種の多きに達するのである。<sup>①</sup>

而してこれらの諸版本は、各特徴を具有し、又その相互の間にも幾多の交渉をもつてゐるので、伽藍記の研究

の第一歩として先づこれら諸版本の基礎的研究を必要とし、これを明らかにしなければ、伽藍記の讀解は頗る困難となり、従つて資料としてこれを活用することも亦、充分出来ないこととなるのである。

故に、此處にこれら諸版本の成立因由、その特徴、並びにそれら相互の系統を組織立て、その全貌を明らかにしたい。

## 二 古著錄に見える伽藍記

洛陽伽藍記が始めて著錄に見えるのは、隋書經籍志(卷三十三)で、洛陽伽藍記五卷。後魏楊街之撰。とあり

又、隋の費長房の歷代三寶紀卷九にも、

洛陽地(地は符字)伽藍記五卷或爲一大卷

右一部五卷。期城郡太守楊街之撰。

と言ひ、唐の道宣の大唐内典錄卷四、續高僧傳(卷一)元魏菩提流支傳、道世の法苑珠林(卷一九傳記篇)等は何れも、

「洛陽伽藍記五卷 楊街之撰」と記録され、且つ歷代三寶

紀には伽藍記の序文の全文が載せられ、大唐内典錄にも亦この序文の概要を録し、又同卷四に、「後魏元氏翻傳佛

經錄第十三」に伽藍記の永寧寺の條がほとんど引用されてゐる。<sup>①</sup>

されば、隋唐時代にかけてこの洛陽伽藍記が既に注目され、且つ流布されてゐたことを知るのである。

次に宋代以後になると、先づ冊府元龜(卷五五六國史部三)に、

楊街之撰洛陽伽藍記五卷廟記一卷

と言つてゐる。所が宋史藝文志(卷二〇四藝文三)・昭德先生郡

齊讀書志(宋晁公武撰)・文獻通考(卷二〇四)・世善堂書目

(明陳第撰)の四書は何れもこれを三卷として記載してゐる。

三は五の誤であるとも一應は考へられるが、然し宋以後には、五卷本が三卷本となつて流布されてゐたのかそれとも五卷本の外に三卷本が存してゐたとも考へられないことはない。<sup>②</sup>

而して、この四書の中、後の三書には何れも撰者の名を羊街之としてゐる。又史通通釋卷五補注篇、史通訓故補卷五補注第十七等にも羊街之としてゐるが羊は楊の誤であることは、神田博士の夙に指摘せられてゐる所である。<sup>③</sup>

何れにしてもこれは唯、著錄の上の記載のみであつて

宋時代のものは現存せず、これを明らかにし得ないのは遺憾である。

### 三 版本 述 略

如隱堂本 増校勘記

現存する刻本の中で、最古のものは、明の如隱堂本である。中國の葉德輝の書林清話(第五)「明人私刻坊刻書」の項に、

如隱堂無年號刻。洛陽伽藍記五卷。見張續志。瞿目。

繆續記。云云。

と言つてゐるやうに、その刊行者並びに刊行年月は不明である。所が中國の董康は、「如隱版刻。似出嘉靖時」(景如隱堂本跋)と言つて、明の嘉靖(一一五二—一五六六)の時であるとし、又中國張の元濟は、その著「洛陽伽藍記校勘記」の跋に、

近世存者。以如隱堂本爲最古。其刊版當在明代嘉隆之際云云。

と言つて、これを、明の嘉靖(一一五二—一五六六)から隆慶(一一五六—一五七二)の頃であると斷定してゐるが、恐らくその版式、紙質等

に依つて判定したもので、従ふべき説であらう。

次に、この如隱堂の原刻本は、何處に存するか未見であるが、清の張金吾の愛日精廬藏書續志卷二に、

洛陽伽藍記五卷 明如隱堂刊本

魏撫軍府司馬楊銜之撰。板心有如隱堂三字。洛陽伽藍記以如隱堂本最善。

と言つて、如隱堂本を彼が藏してゐたことを示し、又清の瞿鏞の鐵琴銅劍樓書目錄第十一卷(光緒二十三年刊)によれば、

洛陽伽藍記五卷。明刊本。題魏撫軍府司馬楊銜之撰。

有自序。此如隱堂刻本。較綠君亭本爲佳。舊爲吳項儒文藏書內。第一卷第二卷並有缺葉。以顧澗濱校本鈔補と言つて、この如隱堂本が、清の常熟(江蘇省)の吳卓信(字項儒)の藏書中にあつて、その刊本は、第一卷、第二卷に缺葉があつて、顧千里(號澗濱)の校本を以て鈔補してあると言つてゐる。

さて、現在見ることの出来る最初のものは、民國四年武進縣(江蘇省)の董康に依る景印本である。董康は如隱堂本を一本有してゐたが、これ亦第二卷の第四・第九・

第十八の三紙を缺いてゐた。そこで、手近にあつた眞意堂活字本によつてこの三葉を補つたことは、彼がその跋中に精しく述べてゐる所である。

而して、この三紙は相當以前から脱落してゐたものと見えて、明の毛扨の跋に既にこの三紙の缺けてゐることを指摘してゐる。(説劍齋刊・集證本所載毛扨跋)

又同跋によれば、毛扨は、曾て町の書肆で如隱堂本の寫本を買つて校正したが、その抄本は、行の間に太平御覽・太平廣記を引いて朱筆を以て書き改められ、そうして參考すべきものがない場合には、自分勝手に填補され大いに本來の面目を失つたものであると言ひ、又、のちに何慈公と云ふ人の抄本を得たが、これ亦、眞偽まじはつてゐて、とるに足らないものであつたと言つてゐる(同上)

以上のことから考へて見ると、如隱堂本は既に明末には完全な形に於ては存在してをらず、然もその刻本は散佚して數少くなつてをり、専ら書寫されてゐたものと考へられるのである。

次に如隱堂本の景印は、玉簡齋叢書の中に縮印して載

せられてゐる外、民國二十五年に、上海涵芬樓が、四部叢刊三編としてその史部に收めてゐる。而して、この四部叢刊本の終りに、張元濟の選する所の校勘記一卷を附してゐる。

この校勘記は、如隱堂本と、清の吳若準の集證本との文字の異同を校勘したものである。抑、彼も注意してゐるやうに、集證本は、その朱紫貴の序によれば、如隱堂本を定本としたものであるから、兩本の間にそんなに異同はないはずである。所が、實際にこの兩本を對校すると、幾多の文字の異同を發見するのであつて、張元濟は、百數十字に及んでこれを校勘してゐるのは、注意されねばならないことである。

綠君亭本 津逮祕書本 照曠閣本

八千卷樓書目卷八に、

洛陽伽藍記五卷 綠君亭本 古今逸史本 學津討原本 附刊集證本 明刊本

と言つて、綠君亭本を初頭に掲げてゐる。而して、明の毛晉の輯する所の叢書、津逮祕書の中にも、綠君亭の三字を板心に有する伽藍記を載せてゐる。然らば、八千卷樓書目に言ふ綠君亭本と、津逮祕書本との關係は如何な

るものであらうか。

書林清話卷七、「明毛晉汲古閣刻書之六」に、

毛氏刻書。板心題汲古閣三字。人人知之矣。然間有稱

綠君亭者。吾所藏二家宮詞。三家宮詞。浣花集三種。

皆如此。尙有洛陽伽藍記。載莫友芝知見傳目。是否爲

毛氏書堂。抑受板於他氏。此亦考毛氏掌故。所當知者

矣。

と言つて、毛氏の刻書は、板心に汲古閣の三字が入つてゐるのであるが、時たま、綠君亭の字が入つてゐるものもある。洛陽伽藍記も亦綠君亭の三字を入れてゐるが、これは、毛氏の書堂にあつたものであるかどうか、或ひは他の人の板を受けて、そのまゝ刊行して叢書の中に入れたものであるか、毛氏の掌故を考へる者は、まさに知らねばならぬ所のものであると言つてゐる。

なほこゝに注意されてゐる莫友芝<sup>⑥</sup>の、「邱亭知見傳本書目」卷五を見ると、

洛陽伽藍記五卷

後魏楊街之撰 漢魏叢書本 古今逸

史本 津逮祕書本 明如隱堂刻本

綠君亭本 璜川吳氏活字刻本

學海本

とあつて、津逮祕書本の外に綠君亭刻本の名を載せてゐる。これに依つて見ると、綠君亭の刻本と言ふのが別にあつて、毛晉は、その板を他よりうけてそのまゝ津逮祕書の中に收めたものとも考へられるのであるが、何れにしても、綠君亭本と、津逮祕書本とは、全く同一の板であると言ふことが出来るわけである。

次に、學津討原第七集に、洛陽伽藍記を收載してゐるが、これ即ち照曠閣本とも稱せられるもので、その板心には、照曠閣の三字が入つてゐる。照曠閣とは學津討原の輯者、清の張海鵬のゐた所である。

而して、本書には津逮祕書本に載せてゐる毛晉の跋をそのまゝ轉載してをり、津逮本と同じ系統を引いてゐることも明らかである。然れども尙ほこの兩書を對校して見ると、所々文字の異同が存するのは注意すべきである。扱て、然らばこれ等の書は、如何なる系統に屬するものであらうか、中國の張宗祥が、その「洛陽伽藍記合校」の序に於て、

綠君照曠。從如隱出。云云。

と言つてゐるやうに、この兩書とも、如隱堂本に酷似し

てゐる點<sup>⑦</sup>から考へて、まさしく如隱堂本の系統を引くものであることは疑ひない。

因に、清の楊守敬は、その著「日本訪書志」の最後に

津逮本最善。眞意本次之。吳何最下。

と言つて、この津逮祕書本を最も高く評價してゐる。何れにしても、これは、如隱堂本について注意せられねばならない版本である。

吳琯本 卽古今逸史本

張宗祥は、その合校本の序に於て、「洛陽伽藍記は、

如隱堂本が版本の最古のものであるが、然も外に、吳琯本があつた。」と述べてゐる。これが即ち、所謂、古今逸史本とも稱せられてゐるものであるが、この吳琯本は、如隱堂の刻本とは、全く系統を異にした所の別個の刻本であつたのである。然らば、それはどのやうに異つてゐるのであらうか。今この兩本を取つて較べて見るに、先

づ、その板式に於ては、如隱堂本が、毎葉十八行、各行が十八字になつてゐるに對し、吳琯本は、毎葉二十行、各行二十字詰となつてゐる。又、楊銜之の自序に於てもその改行の場所は、兩本著しく異つてゐる。次に又、文

字の異同に至つては特に著しく、僅か序文のみに於ても、三十七字と言ふ多數の異字を發見するのである。

その外、編次の様式に於ても、この兩本は各々特色をもつてゐるのであつて、これ即ち、兩本が全くその據る所を別にし、その系統の異なるものより出てゐることが明らかである。

次に、この吳琯本が出來たのは何時頃であつたか明らかにし得ないが、吳琯は、明の漳浦（福建省）の人でその生卒は明らかでないが、彼は隆慶（一五六七—一五七二）の進士であるから、彼が洛陽伽藍記を校したのも、如隱堂本とほぼ同時代と思はれ、たとひ如隱堂本より後としても、あまりそれより時代は降らないものと推定して差つかへないであらう。

かくの如く、明代に於て、ほとんど時を同じうして、全く異つた系統の兩本が出來たと言ふことは、まことに注意すべきことである。張宗祥は、これについて、「如隱堂本と、吳琯本の明刻の二種は、各々淵源ありと雖も、清代以後の諸刻は、ほとんど皆、如隱堂本により、是に於て、大宗存し小宗亡ぶ。」（合校の序）と言つてゐるやう

に、吳琯本の系統は、次に述べる漢魏叢書本のみであつて、清代以後には、眞意堂本が半ばその系統を引いてゐる以外には直接にその系統を引く刻本は出てこなかつたのである。

尙ほ、吳琯本は、吳琯の輯した叢書古今逸史の中に收められ、その古今逸史は、上海涵芬樓に於て景印されてゐる。

### 漢魏叢書本

漢魏叢書は、その成立の次第が極めて複雑で、然もそれには幾多の種類があるのであるが、洛陽伽藍記が載せられてゐるのは、明の何允中の輯による廣漢魏叢書七十六種本、清の王謨の輯である增訂漢魏叢書八十六種本、そして、清光緒六年刊の九十種本である。<sup>⑩</sup>

扨て、この漢魏叢書本は、先に一言したやうに、全く吳琯本の直系を引くもので、この兩書を對校して見ると、その各行の字數、その段落編次の體裁等、全く同一であり、然も兩書間の文字の異同は、極めて少い。民國の張宗祥が、「漢魏は吳琯より出す」と言ひ、又、「漢魏叢書本が、缺字が比較的に少いのは、これ亦、吳琯本に依つ

てゐるからである。」(洛陽伽藍記合校の序)と言つてゐるのは、以上のことから考へて、全く正しいと言はねばならない。

次に、注意すべきことは、何刻の廣漢魏叢書本は、徐仁毓と言ふ人が、これを校閲してゐて、文中いたる所に評點がつけてあると言ふことである。大體、明代に於ては自分の氣に入つた書には評點をすると言ふのが、一つの流行をなしてゐたらしく、特に、萬曆頃が評點の盛な時で、面白い文字があると、それに評點して、興味を惹くやうにして出版したと言はれてゐるが、この漢魏叢書本の洛陽伽藍記も亦、かゝる流行の波に浮び上つてゐることは興味深いことである。

次に、王刻の增訂漢魏叢書本の伽藍記は、寧都(江西省)の廖飛熊と言ふ人が校してゐるが、それは、何刻の漢魏叢書本の闕字を所々補つてゐる程度であつて、あまり手を加へたものではない。

何れにしても、この漢魏叢書本の洛陽伽藍記が、如隱堂本の系統とは全く異つて、吳琯本の直流をうけつたものであると言ふことは注意されねばならないことであ

る。

### 眞意堂本

清の嘉慶十六年（一八一二）瑣川（江南蘇州府）の吳志忠の輯刊本である。兼明書五卷・河朔訪古記三卷と共に、眞意堂三種として收められてゐる。吳志忠は顧廣折と親交のあつかつた人で、眞意堂とは、彼のゐた所である。

ではこの眞意堂本は如何なる系統に屬する版本であらうか、本書の末葉を見ると、

乙巳。舊鈔本校一過。曹炎志。

と言つて、本書刊行の二十數年前の乾隆五十年に、曹炎（常熟の人）が舊鈔本を校したとある。この舊鈔本なるものが如何なるものであつたか知ることを得ないが、中國の董康は、これについて、

嚮聞。眞意本與吳若準集證。並源出如隱。今取勘對亦未必盡然。大率各有校改。（景印如隱堂本跋）

と言つて、これが、如隱堂本の系統を引いてゐると聞いてゐたが、今これを對校して見ると必しも、ことごとくはそうでなく、大率校改した所があると言つてゐる。これに依れば、眞意本が、如隱堂本から源を發してゐると

言ふことが、昔から言はれてゐたと考へられる。所が、藝風藏書續記卷三（謬荃孫撰）には、

洛陽伽藍記五卷

吳眞意堂活字本。長洲張詒釐。以如隱堂本校之。又從毛斧季手校家刻覆勘云云。

とあり、又その後、

張氏手跋曰。嘉慶己卯季冬。依如隱堂刻本席玉照舊藏

校正云云。張紹仁記。

と言つてゐる。これに依れば即ち、謬荃孫の藏書の中に吳氏の眞意堂活字本があつて、その本は、張紹仁（字詒釐）が嘉慶二十四年、即ち、吳氏の眞意堂本の刊行より八年後に、如隱堂本と毛斧季手校本とを以て校した本であつたのである。これに依つて考へられることは、若し眞意堂本が如隱堂本によつてをり、その系統を引くものであれば、この眞意堂本が刻されて僅かに八年後に、張紹仁が、再びこれを、如隱堂本によつて校正する必要はないわけである。従つて眞意堂本が、如隱堂本の直系を引いてゐるとは考へ得られない。然らば、曹炎の校したと言ふこの眞意堂本とは一體如何なるものであらうか。



今、本書と、そして明代の二源流である如隱堂本と吳琯本の三書を對校して、以てその解決の鍵を見出さねばならない。

先づ、本書の毎葉の行數、各行の字數は、如隱、吳琯の何れとも異つてゐるのであるが、その編次の體裁、即ち、改行の場行とか段落、その他各卷初に於ける標題の出し方等は、全く吳琯本と同一であつて、體裁だけから見れば、本書が吳琯本からその系統を受けてゐると思はれる點が多い。所が文中の文字の異同を仔細に検討すると、次のやうなことを知るのである。即ち、如隱堂本と吳琯本との文字の異同ある場合に、眞意堂本のその箇所の文字は、或所は如隱堂本の字を以てし、或所は吳琯本の字を以てしてゐる。而して、その何れを主してゐるとも考へられない。更に又、兩書の異字を兩方とも取入れて一句をなしてゐるやうな場合もあつて、例へば如隱堂本が、「嘗造三層樓」(伽藍記序)と言ひ、吳琯本が、「帝造三層樓」と言ふのを、眞意堂本は、「帝嘗造三層樓」としてゐる。かくの如きは、全く雙方からその足らない所を補つてゐることが明らかである。以上のことから考

へて、眞意堂本は、明刻の二源流である如隱堂本と吳琯本との何れかを主流として受けたと言ふのではなく、その雙方から、その各々の長所をとつてゐるのであつて、曹炎の校した舊鈔本は、かゝる性質のものであつたことを知るのである。

而して、楊守敬の日本訪書志に於て、伽藍記の佳本として、津逮本の次に、この眞意堂本をあげてゐる理由も又先に述べた如く、民國四年の董康の如隱堂景印本が、その缺けてゐる三葉を、この眞意堂本によつて補つてゐる或理由もうなづけるわけである。

#### 四 集證・鈞沈・合校・周注・重定本

吳若準集證本

吳若準の集證は、洛陽伽藍記に對して行はれた最初の考證として世に知られてゐるものである。

抑、伽藍記の古い形は如何なるものであつたかと言ふに、唐の劉知幾が、その史通補註篇(史通卷五)に於て、

—前略—遂久定彼榛櫟。列爲子注。若蕭大園淮海亂離志。羊銜之洛陽伽藍記。宋孝王關東風俗傳。王劭

## 齊志之類。是也。

と言つてゐるやうに、唐代の洛陽伽藍記には、本文と子注とがあつたやうで、それが明代に至つて子注が正文に雜入して分別することが出來ず、これをふるひ分けしなかつたら讀むことがむづかしくなつてゐたらしい。清朝の顧千里は、既にこのことを指摘して、「伽藍記はもと大小の字を用ひて、子注と本文とを分つてゐたのが、後世の人が、これを連寫してしまつたのである。」(思齋集卷十四 顧千里跋)と言つてゐる。

吳若準の集證は、かゝる伽藍記の状態を改め、編次をなし、綱目を修め、諸刊本によつてその異同を校合したものである。その大略は、如隱堂本に據り、何鏗の漢魏叢書本、毛斧季本を參考としてゐる。その他、太平廣記・太平御覽・法苑珠林をも多く引證してゐる。又前記の外、魏書・北史・水經注・史通・文獻通考・文選・續古文苑・大品經・眞意堂本等、廣い範圍にわたつて考證の資を集めてゐることは、本書が高く評價される所以である。更に又、卷首に洛陽の繪圖一葉を載せてゐることも本書の功績の一つであると考へねばならない。

扱て然らば、この集證が如何なる經過をたどつて、出

來たであらうか。今その卷首の朱紫貴の序文に依れば、會て、顧千里が今世流通してゐる洛陽伽藍記が、その綱目混淆としてゐるのを憂ひ、朱紫貴にむかつて、「あなたは伽藍記を唐の劉知幾の言つてゐるやうに、注と正文とを分析して、唐代にあつたやうな形にしたらどうか」と言つた。そこで朱紫貴はそれに着手したが、中途にして業をやめ、成就することが出來なかつた。所が朱紫貴の甥にあたる吳次平(若準)が、暇を乞うて南のかた父母のもとへ歸つてゐる時、兼ねてこの書を校し、約一年にして遂に定本が出來上つたのである。

尙ほ、餘筆ながら、朱紫貴はその序の最後に、「惜むらくは、私にかくの如きの定本を作るやうにと言つて呉れた顧千里先生は、今病氣で立つ事が出來ない。」と言つて歎じてゐるが、顧千里は、その翌年、即ち道光十五年(一八三五)七十歳を以て歿してゐる。然し、彼の存命中に、彼が多年氣にしてゐた伽藍記の體裁と考證が出來て、一應伽藍記の舊觀に復することが出來たと言ふことは、せめての幸であつたと言はねばならない。

なほ、この集證本は、民國になつて、古書流通處に於て、古書叢刊として景印され、又中國書店に於ても、その景印書之三として景印してゐる。

#### 説劍齋集證本

吳若準の集證本が出来た後、約七十年にして、即ち、光緒二十九年（一九〇三）に義州の李葆恂がこれを覆刻した。これ即ち説劍齋刊本である。何故に李葆恂が吳若準本を覆刻したか、その由來、又その兩本全々同一であるかどうかを簡単に述べて見よう。

吳若準の集證本は、清末の亂によつてほとんど失はれ希に傳つてゐるに過ぎないと言ふ状態であつた。所が、李葆恂が光緒の初に、大梁（河南開封縣）へ行つてゐた時、たまたま吳氏の集證本を得たので、早速これを翻刻しようと思つたが、遂に果すことが出来なかつた。所が當時、洛陽令となつてゐた吳若準の族弟にあたる吳若煥が、漢魏叢書本によつて、伽藍記を重刻せんとしてゐるのを知り彼はすぐ若煥に書を寄せ、且彼のもつてゐる吳氏本をおくつて、これを覆刻するやうにすゝめた。若煥は非常に喜んだが未だそれに着手せずして數年の後、死んでし

まつた。それで遂に彼に借し與へてゐた吳本は還つてこなかつたのである。所が、光緒二十八年冬、李葆恂が繆荃孫（一八四四—一九一九）に武昌で會つて、話がたま／＼このことに及び繆荃孫の藏してゐた吳氏本の二冊の内、一冊を贈られた。そこで彼は亟かにこれを覆刻したのである。

扱て、李葆恂がこの吳若準本を翻刻するのに、如何なる態度を取つたのであるか、全く無批判にこれを行つたかと言ふと、決してそうではなく、彼の跋文にはこれについて更に詳細なる説明を加へてゐる。即ち、吳氏の集證本が、范明友を范友明に、高貴郷公を貴高卿公に、祖瑩を祖榮に作つてゐるのは、明らかに謬であるが敢てこれを改めることをせず、原の版本通りにした。但し、貴高卿公と言ふのは、貴と高との入れ違ひであるからこれを改め、又、元父と言ふのは板本を彫つた人の誤であるから、元又（魏書卷一六北史卷一六）と改めたと言つてゐる。

かくの如きは、明代の學者が、輕々しく古書を改訂した弊があつたのにかんがみて、みだりに先人の書を改めることをせず、別に札記を作つた清朝學者の態度をもの語るものである。

集證本の説明を終るにあたつて、特に考へねばならぬことは、清朝になつて急激に學問の進歩を助けたのは、校勘學の盛になつたと言ふことであつて、この考證學、校勘學は、清朝の學風の一特質をなすものであり、それは顧千里に至つて、その全盛期を現出したのである。<sup>⑩</sup>

吳若準の集證も、かゝる時代の產物であり、その時代の學風を代表する一つであると考へられる。かつ又、當時、校勘學でとり扱つた書籍には、史部に屬するものは少く、古版本はなほ少かつたことを考へるとき、吳氏のこの伽藍記の集證は、特に歴史的な存在として、支那史學史上に於ても、特に注意しなければならぬであらう。鈎沈本

民國四年、唐晏は、「吳氏の集證本が、伽藍記について正文と注とを分つて、はじめてその眉目が整つたのであるが、なほ、その正文と注との限域が未だ混淆を免れないもので、舊編に勝ると雖ども、猶未だ充分ならず。」(鈎沈序文)と言つて、洛陽伽藍記鈎沈五卷を選した。

抑、この伽藍記を出来るだけ古い形にもどしたいと言ふのは、かの顧千里以來の宿願である。さうして出来る

れば、楊銜之の著作當時の形にまで、復原出来れば、最も理想的であるに違ひない。そこで唐晏は、

「凡そ、古人の著述には、必ず一定の體裁がある。而して、北魏人の著述で現存するものに、水經注があるから、伽藍記も亦、水經注の體裁にならつたならば、最も古い形に復原出来るであらう。」(鈎沈序)と考へた。かくて鈎沈本は、全く從來のものと異つた形を取るにいたつたことは注目すべきことである。

然らば、唐晏は如何なる意圖と方針を以て、その體裁を整へんとしたのであるか、彼の序文を參考としてその大略を次に述べて見よう。

1、本書が伽藍記について記するのであるから、自ら書を以て主とすべきである。故に凡そ記事の寺のことに及べば一格を高くし、その他の餘文は一段低くして、それに附してゐる。

2、本書の名が、洛陽の伽藍記であるから、洛陽の市、里も亦、概ね正文に入れ一格を高くしてゐる。

3、當時の人の第宅の項も亦、一格を高くしてゐる。

4、附注は、更に一段を下げて書き、更に文中に出て

くる楊銜之の言は、細字で夾行して出してゐる。

5、この伽藍記は誤字が極めて多いから、訂正すべきものは、諸本を再三斟酌して、その一つに従つてゐる。

但しこの場合、訂正した字には、圈點をつけてこれを明らかにしてゐる。

6、諸本を斟酌しても、どうしても従ふべきものがない場合には、自己の判斷に於てこれを定め、その改めた字には必ず△印をつけて、これを明らかにした。例へば卷一の「果林」、卷三の「以是人謂云云」の如きがそれである。

7、伽藍記に出てくる人物は、魏書北史等を参考として皆その大略を注してゐる。

8、吳氏の集證に載せてゐる洛陽の圖を、更に改訂して總圖一葉として、卷首にのせてゐる。

以上の如く、鈎沈本は、幾多の特徴をもち、而もその體裁は、未だ試みられたことのなかつた全く新しい形に整理されてゐて、伽藍記の讀解には頗る便利なものである。

尙ほこの鈎沈は、龍谿精舍叢書史部に收められ、又、

上海中國書店景印之四として刊行されてゐる。

洛陽伽藍記合校本

中國の張宗祥のこの合校本は、諸本を校合してゐる點に於ては、吳若準の集證本よりもなほ廣く、且つ精詳となつてゐる。従つて、伽藍記の研究には、集證本と共にこの合校本を合せ参考としなければならぬ。

所が便利なことには、本書には、張宗祥の補正した吳若準の集證と、集證の正文、並びに鈎沈本の正文とを載せてゐる。従つてこれらの書を合せ參考するのに頗る都合よく出來てゐる。其他、序跋一卷をのせて、從來の諸本に出てくる序跋を、大部分網羅してゐることも注目すべきことで、これらのことも亦、合校本が、高く評價されねばならない所以である。

周延年注本

本書は、民國二十六年、海上萬潔齋石印本である。周延年（浙江省吳興の人）は、その跋に於て本書の著作の目的について次の如く述べてゐる。即ち、「六朝文學の詞華の美と稱せられてゐるものに、伽藍記・水經注・齊民要術の三著、並びに、北齊の顏之推の家訓がある。その

中家訓と水經注には、清以來諸家によつて注釋が作られてゐて大いに明らかにされてゐるが、伽藍記のみは、未だ注釋を専らにした書が出来てゐない。依つてこれを憾としてこの注を作つたのである云云。」と、これ所謂、集證本・合校本が、諸本の考證校勘に優れてをり、鈎沈本が、その編次體裁を整へるのに力をそゝいでゐるのに對して、本書は注釋をつくることを以て、本分としてゐるのである。従つて、伽藍記各本の文字の異同についての校讐には意を用ひてゐないのであつて、すべての文字や分段の方法は専ら鈎沈本に従つてゐるのである。

次に、本書の末に、「楊街之事實考」を載せてゐるが、これには、四庫全書總目・廣弘明集・續高僧傳、並びに伽藍記卷一の永安の年の條等を引いて、楊街之の出所について究明してゐる。従つてこれは、楊街之に對する研究には是非參考としなければならぬものである。

重定本（未見）

中國の除高阮は、「洛陽伽藍記補注體例辨」(歷史語言研究第二十二本 一九五〇年刊)と言ふ論文に於て、「洛陽伽藍記は、作者

楊街之が自ら補注をなしてゐたのであるが、後世それが

正文と混淆し分別なく、集證本・鈎沈本が始めてこの文注を厘別したのであるが、尙惜むらくはこの二氏も亦、未だ原書補注の體を詳かにせず、その定むる所均しく確當と稱し難いものである。」と言つて先づ伽藍記の補注の體について、集證本と鈎沈本にするどい一矢をむけ、更に、

余以民國二十八年。得聆陳寅恪先生論伽藍記補注之體。乃本先生之意。再事稽求。遂重爲此記厘別文注。冀復其舊觀。而姑名所定曰。「重定本」。計稿成以來亦歷十載。遭時多難。付刊未遑。中間見者無多。云云」

と言つてゐる。即ち重定本とは、除高阮が陳寅恪(江西義一八八)の、「洛陽伽藍記補注體」と言ふ論をきき、其意に基づいて更に攻究し遂に重ねて伽藍記の注と正文とを分けたもので、集證鈎沈より更に一步を進めたものゝやうである。その稿は既に民國二十八年に出来てゐたが、國事多難の折で刊行の遑なく今日に至つてゐるのである。本論文を載せてゐる「歷史語言研究所集刊」は一九五〇年七月に臺北に於て刊行されてゐるから、恐らくこの重定本も近く我々の前にその全貌を現はして呉れるこ

とであらう。

## 五 結 語

以上、洛陽伽藍記の諸版本についての考察、その相互の關係、系統を述べたのであるが、要するに、明の嘉靖隆慶の頃、如隱・吳琯の系統の相異つた二版本が出たのであつたが、その後、如隱堂本の系統を引くものが相ついで現れたのに對し、吳琯本の系統を引くものは漢魏叢書本と、清朝にいたつて、眞意堂本が半ばその系統を引いてゐるに過ぎない状態であつたことは注意すべきことである。次に、如隱・吳琯の兩本の優劣を言ふならば、如隱には缺字が非常に多く、吳琯はそれが比較的少い故一應は吳琯の方が優れてゐるやうにも思はれるが、然しそれは、さに非ずして吳琯の缺字の少いのは、彼が恣にこれを補つた形跡があり、誤れる個處もあつて、如隱堂本が優れてゐることは古今を通しての定説のやうであるが、これについての詳しい考證はのちの機會にゆづりたい。ともあれ以上述べ來つた如く、諸版本の相互の關係系統が明らかになれば、如何に文字の異同の多い伽藍記

も、その異同のよつて來たる所以のものが、自ら明瞭となり、その讀解も頗る容易となるわけである。

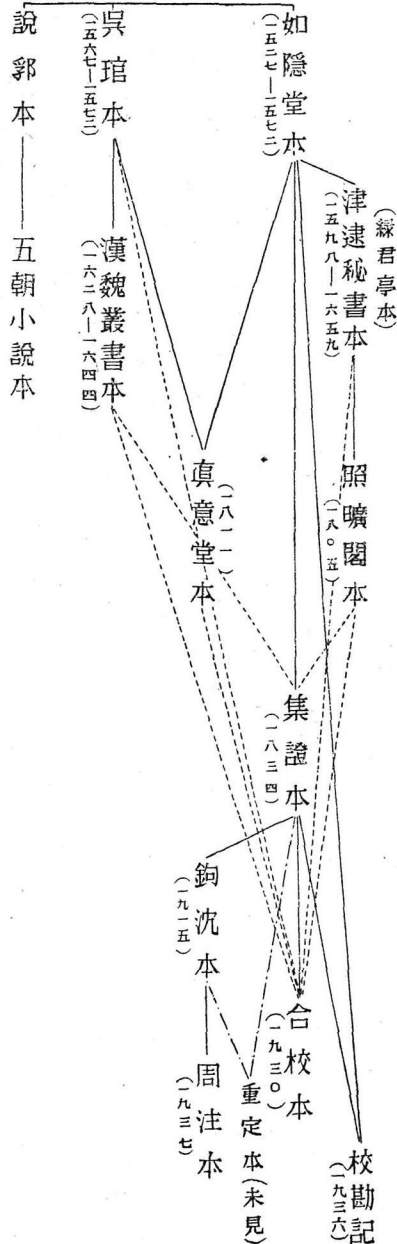
扱て最後に一言しなければならぬことは、說郛本についてである。集證・鈎沈・合校・周注本の何れも、說郛本については、これを取上げてをらず、何等問題にしてゐないことは注意すべきことである。

そもそも、今日行はれてる說郛は、陶宗儀の集めた原本のまゝでなく、後人の勝手に節略したもので、說郛第四に收めてゐる洛陽伽藍記五卷と言ふのは、實は内容は五卷に非ずして簡單な伽藍記の抄録に過ぎず、重較說郛所收の一卷本も亦然りで、學界に重きをなしてゐなかつたと思はれる。然しながら說郛は叢書としては古いものであり、然もその體裁内容はゆるがせに出来ないものをもつてをるのであつて、その所收の伽藍記は如何なる系統のものであつたか問題として残されるわけである。

次に五朝小説所收の一卷本は、その形式内容ともに、全く說郛本と同一である。それは、五朝小説が明人（闕名）によつて說郛を用ひて重刻されたものであるから當然と言はねばならない。

以上のべた所について、これ等諸版本の系統を圖示す

れば左の如くである。



註

① 「大谷學報」第二十九卷第三・四合集號 東洋學關係佛典目錄二「洛陽伽藍記の部」參照

② 大唐內典錄卷四の「後魏元氏翻傳佛經錄第十三」に引かれてある永寧寺の項は、未だ注意されてゐないが、その中には相當多くの文字の異同が見られる。

③ 中國の張元濟は「洛陽伽藍記校勘記」の跋に於て、五卷本の外に三卷本の別本があつたのかも知れないことを述べてゐる。

④ 四部叢刊に收められてゐる史通には「楊銓之」と云ひ、清の盧文昭の「史通校正」には、「羊は譌なり」と云つて

ある。

⑤ 「東注史研究」通卷第九卷第五・六號 神田喜一郎氏「洛陽伽藍記序」劄記、參照。

⑥ 莫友芝は號は邵亭、貴州の人、清仁宗嘉慶十六年（一八一）生、穆宗同治十年（一八七）卒。

⑦ 如隱堂本の板式は、每葉十八行、各行十八字、津逮秘書本は、每葉十六行、各行十八字であつて、各行の字數は兩本一致してゐる。又その文中の改行、段落の編次は、兩本全く一致してゐる。

⑧ 吳何とは、吳琯本と何鏜の漢魏叢書本のことである。

⑨ 漢魏叢書は、明の何鏜（一二五—一二六）が、漢魏六朝の群書を集



めて百種を得たのを、のち明の屠隆が六十卷として漢魏叢書と名づけ刻に付した。これ明史藝文志に收められてゐる所であるが今は傳つてゐない。幾くもなく程榮が何鏗の原本によつて三十八種を刻し又漢魏叢書と言ふ。其後何允中がこれに三十八種を増して七十六種として、廣漢魏叢書と名づけた。(明崇禎の間  
一六二八—一六四四)

⑩ 彙刻書目によれば、乾隆年間に蘇州書坊刊の八十種本の外九十種本の漢魏叢書をあげ、その何れにも伽藍記の名を載せてゐるが、これは未見であり、その編者も不明である。

⑪ 内藤虎次郎氏著「支那史學史」の「明代の史學」参照。

⑫ 何刻漢魏叢書には、□夫耕稼(序文) 太和□九年(卷一)

一千餘□(卷三) とあるを、王刻漢魏叢書にはそれぞれ

農。夫耕稼太和十九年、一千餘間。としてゐる如きはその一例である。

⑬ 吳琯本は每葉二十行、各行二十字、眞意堂本は每葉十八

行、各行二十一字である。

⑭ 范明友は漢書(卷九四)に、高貴郷公は三國志(四卷)に祖瑩

は魏書(卷八三)・北史(卷四三)にそれぞれ列傳がある。

⑮ 内藤虎次郎氏「支那史學史」「清朝の史學」の項参照。

⑯ 「果林」を如隱堂・綠君・照曠・集證本は「奈林」に、

漢魏本は「奈林」に作つてゐる。又「以是」の二字は、如

隱堂系の諸本には無い。漢魏本には「以世」の二字となつ

てゐる。

⑰ 「大谷學報」第二十九卷第三・四合集號 「東洋學關係

佛典目錄二」参照。

## 附記

吳琯本は京都大學人文科學研究所藏本を見せていただき、合校本は神田先生所藏の版本を見せていただいたことを感謝すると共に、御指導を賜つた關係諸先生方に深謝する次第である。

## 前號目次

宗教への教養

三信釋の論理

維摩經佛國品の原典的解釋(下)

大谷本廟留守職考(下)

## 次號豫告

化度寺毘禪師塔銘校字記

解脫上人の學風と同學抄

説一切有の立場

御消息に忍ぶ晩年の親鸞聖人

前田 博

太田 祖電

山口 益

多屋 弘

中田 勇次郎

富貴 原章信

櫻 部 建

鷲山 樹心